
5 . 妄想学園読書愛好会

koru.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

5・妄想学園読書愛好会

【著者名】

k o r u ·

【あらすじ】

妄想学園の5話としてお読みいただくこと推奨いたします。

読書愛好会の部員であり遅刻魔である少女と、その彼女を見守る少年の心温ま……げふんげふん、ココロアタタマルお話です。

なんでウチの部室こんなに狭いんだろう……。

去年はもう少し広かつた気がするんだけどなあ。

そして、なんでこの壁だけペンキを塗り替えたのかなあ……この壁だけ色が浮いちやつてみつともない。

誰も居ない部室で一人で首を傾げる少女。

読書部：もとい、読書愛好会の唯一の活動部員である少女は、憂いを帶びたため息を吐いた。

部員は総勢30名以上いるのに、実質活動しているのは少女ひとりである為、部への昇格が認められないという、あってもなくても良いような愛好会である。

なぜ存続しているのかすら不明なこの愛好会だが、なぜか年に何人かはこうして真面目に部室に足を運ぶ生徒がいる。

今年は、この御手洗水和ただ一人だったが。

水和は壁から目を離すと、とても場所を取る……これを置いてあるだけで部室の面積が一気に狭くなると絶不評の作業机に向かい合い、目の前にある真っ白な原稿用紙に向かってため息を吐く。

一学期に入つて二桁目の遅刻に対する反省文を書くための原稿用紙だ。

小柄で真面目そうな外見を裏切り、彼女は幼い頃から寝穢い。
朝起きれないだけで、日中の彼女は外見通り真面目なのであるが
如何せん、風紀委員会にはしっかりと目を付けられている。

机に頬をペットリと付けて、パラパラと原稿用紙をめくる。

合計10枚の原稿用紙はいくら風を通しても減ることはない。

水和の口からため息と共に、何か大事なものも若干逃げ出しているようだ。

「あれだよねえ…」これはもう、朝学校にくるのを諦めて、ここに寝泊まりすればいいんじゃないかしら！」

名案！ とばかりに、ガバッと体を起こして彼女が叫ぶと同時に、色を塗り替えた方の壁からガタガタガタツと誰かが転んだような音がした。

「？」

隣は保健室だったが先ほど部室に来る際に、養護教諭が保健室に鍵を掛けているのを見た、よって保健室は無人のハズなのだ。

水和は小首を傾げると、確認すべく部室を出てすぐ隣の保健室に向かった。

ドアに手をかけて開けようと試みたが、やはり鍵がかかっているようで開かない。

「どうした？ 怪我でもしたか？」

突然後ろから掛けられた声に、小さく飛び上がる。

「う、有働サン。い、いえっ！ なんでも……」

なんでも無いと言いかけ直した水和は、さつき聞こえた音の事を用務員である有働に伝えた。

「この部屋から音がしたのか」

有働はもう一度確認すると、腰に下げる鍵束から、迷うこと無く一本の鍵を出して保健室の鍵穴に差し込んだ。力チリと小気味良い音がして錠が外れる。

有働はぐるりと中を見回し、首を傾げながらも保健室の中に入つて異常が無いか点検してゆく。

水和も有働の背中に隠れるよつとして、保健室の中を進む。

「誰も居ないし、特に何もないがなあ。おつと、失礼」

ガリガリと短髪の頭を搔き、困ったように小柄な女生徒を見下ろしていた有働は、何かに気づいたようにポケットから小型の携帯の振動を止めると、ニヤリと口元を歪めた。

「ちがうない いま かくして 獣物が かがみ みたいで な
と 手が 離せなくなつた」

保健室の鍵を閉め真っ直ぐに用務員室に向かつた有働を見送り、

そして、やつきの音よりも何よりも、目の前にある原稿用紙を片付ける方が急務だと思い出す。

「なぜ、気づかないんだ……」

少年は呆れたよつてひづぶやきを漏らす。

土日を掛けて建築科の有志に依頼して、突貫工事でこの壁を創り上げた。

無論この準備室…正しくは英語準備室という名のこの部屋の主には許可を得てゐる、袖の下として畜産科と土木科のマツチヨ共の画

像データを24MBのUSBメモリに満タンに入れたものを渡したら快く了承してくれた。（勿論、無断撮影ではなく、有志を募つての撮影である）

先刻ずつこけてしまつた音に慌てて出ていった女生徒とは別の声がして、壁を出ようととした手が止まる。聞き覚えのある声に、この部屋を改造する際にさせられた約束を思い出す。

「マー・ウマーにはバレないよにねー、頼むアルヨー。ワタシ締められちゃうからネー」

どこで覚えたのか怪しい日本語を使つ英語教諭の声で再生された注意事項に思わず息を詰める。

響く鼓動を抑えながら成り行きを見守つていると、少女は一人で戻り、そしてまた机の上の原稿用紙とにらめっこを始めた。

日が傾き始めても少女の手が反省文を綴る様子がない事に、少年は落胆する。

そして、これ以上は付き合いきれないと、疲れを切らして秘密のドアを開けて狭い壁の隙間から出て愕然とする。

「寝てやがる……っ」

一体いつからだつたのか、考へてる姿勢のまま彼女はすうすうと氣持ちよさそうな寝息を立てていた。

一瞬湧き上がる何かを抑えこみ、少年は彼女の前の真っ白な原稿用紙を回収して、彼女のカバンに突っ込む。

そして、爆睡している彼女を抱き上げると、準備室を出て鍵を掛けそのまま学園の向かいにある住宅を手指す。

幼い頃は毎日のように通っていた家だ、勝手知つたるなんとやら、一応チャイムを鳴らして応答が無いのを確認すると、彼女の両親から預つているスペアキーで鍵を開けてずんずんと中に入り、二階の手前の部屋のドアを開けそこにあるベッドの上掛けを乱暴にめぐると少女をベッドに落とし、乱暴に上掛けを掛ける。

「本つ本当に手がかかるつ」

「あつ、私もひとつ不思議体験あるよー」

教室内、ほぼ総ての生徒がワイワイと弁当を食べてる中、校内放送の話題が”学校の7不思議”になつたところで、水和は箸を止めて声を上げた。

「最近ねえ、部室で反省文書いてるとちよくちよく寝落ちしちゃうんだけど。気がついたら家のベッドで寝てるんだよねえ。もしかしたら、親切な小人さんが心配して届けてくれてるのかなあ？ ね？ ねつ？ 不思議でしょ？ 英語準備室の小人さんの怪！ 今度放送部に投稿してみようかなあ」

楽しそうにそう友人と話をしている水和たちの後方に陣取つてい

た、男子生徒達が不意に黙りこむ。

「 「 「 「 」 」 」

「お前らなぜ、俺を見る。さつさと食つて、バスケしにいくぞ！」
友人たちの視線の集中砲火を浴びた風紀委員の男子生徒は残りの
弁当を搔つ込み、カラになつた弁当箱を乱暴にカバンに突つ込むと、
勢いよく席を立つ。

その彼を慌てて追いかける男子生徒達。

「待つてくれよー小人さ フゴツ！」
「新聞部の学園フ不思議認定に申請してもいいで ゴフウ！」
「小人より壁に気づいて欲し ガツ！」
「送りおおか ゴツツ！」

「男子つて仲が良くていいねえ」
「あたしゃ、アンタの鈍感つぶりが羨ましくないわ、やつぱり」
哀れな男子生徒の背中を見送る友人のため息に、首を傾げる水和
だつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0208z/>

5 . 妄想学園読書愛好会

2011年12月1日21時53分発行